
東京外国語大学

ICS 12—2008

総合文化研究所

2008 年度所員活動報告

【論文・研究資料】

- ・阿保雅行・長野史尚・神尾正俊・石井智也・関岡康雄（2008）全日本学生陸上競技チャンピオンシップの競技運営に関する満足度・改善度について—— 2006年と2007年の大会を中心に——、陸上競技研究第73号：34-39.
- ・阿保雅行・長野史尚・神尾正俊・石井智也・関岡康雄（2008）日本学生陸上競技個人選手権大会の競技運営に関する満足度・改善度について—— 2008年の大会を中心に——、陸上競技研究第74号：47-54.
- ・阿保雅行・伊藤宏・岡野進（2008）全国小学生陸上競技交流大会に参加した小学生競技者の競技運営に対する満足度・改善度について（その2）、陸上競技研究紀要第4巻：26-33.
- ・阿保雅行・黒澤達郎・中島剛・鈴木一弘・吉儀宏（2008）観客からみた競技会アナウンスの満足度・改善度について（その2）——セイコースーパー陸上競技大会2008川崎を中心に——、日本陸上競技連盟競技運営委員会審判部イベントプレゼンテーション研修会資料.
- ・阿保雅行・長野史尚・神尾正俊・石井智也・関岡康雄（2008）競技運営に関する競技補助員の満足度・改善度——日本学生陸上競技個人選手権大会2008を中心に——、陸上競技研究第75号：43-48.
- ・阿保雅行（2008）本学におけるスポーツ・身体運動基礎科目の満足度・改善度について—— 2008年度1学期のアンケート調査を中心に——、東京外国語大学論集第77号.

【テキスト（校閲・指導）】

- ・阿保雅行（2008）陸上競技、スポーツルール2008、(株)学習研究社、pp.1-22.

【学内研修会資料（本学体育会運動部の幹部研修会資料）】

- ・阿保雅行（2008a）本学体育会運動部の運営に関する満足度・改善度について（報告書：資料編）、2008年8月4日発表.
- ・阿保雅行（2008b）部員からみた本学体育会運動部の満足度・改善度——アンケート調査2008を中心に——、本学体育会リーダーシップトレーニング資料（2008年12月20日発表）.

【その他（とりわけ国際的活動）】

- ・第13回アジアジュニア陸上競技選手権大会（ジャカルタ、インドネシア、2008年6月10日～17日）にATO（Area Technical Official、地域競技役員）として競技会運営のために参加した。

【共著】

- ・『新版 東南アジアを知る事典』東京：平凡社、分担執筆、16項目、「アイルランガ」「ラーマヤナ」「ワリ・ソング」「文学 (古典文学)」「クディリ」「クラトン」「クルタナガラ」「シンガサリ」「デーシャワルナナ」「ヒンドゥー教」「マジヤパヒト」「ジャワ」「パララトン」「マドゥラ」「タントゥラル」「口承文芸」、2008年。
- ・『ブリタニカ・オンライン・ジャパン』 (<http://japan.eb.com/>) 東京：ブリタニカ・ジャパン、分担執筆、1項目、「東南アジア (伝統文学)」、2008年..

【論文】

- ・「東南アジアのイスラーム地域における天変地異の語り——インドネシアにおける古典ジャワ文学の事例を中心にして——」『天変地異の社会学』（桃山学院大学地域社会連携研究プロジェクト共同研究活動報告書）、pp. 14-29. 2008年。

【研究発表】

- ・「ベンガル湾を渡ったインド的文明：東南アジアからの視点」、日本南アジア学会設立20周年記念連続シンポジウム第3回「『インド的』文明とは何かII」報告、2008年1月12日、京都大学。

【著書】

- ・ *Ralph Ellison and Individuality (Tokyo: Nan'un-Do)* 2008年12月16日、227頁。

【論文】

- ・「〈バーボ〉、その攻撃的沈黙の視線」、『メルヴィル後期を読む』、中央大学人文科学研究会編、中央大学出版部、研究叢書43、2008年2月28日、(45－78) 224頁。
- ・「認知不能の恐怖 (Fear of Agnosia) ——人種記号 (レイス・マーカー) とトニ・モリスンの「レシタティフ」」、『総合文化研究 特集：表象のポリティクス』第11号、東京外国語大学総合文化研究所、2008年3月21日、(31－60) 159頁。

【翻訳】

- ・『マルコム X 事典』東京、雄松堂、2008年8月11日、482頁。

(*The Malcolm X Encyclopedia*, Robert L. Jenkins ed. New York: Greenwood Press, 2002)

【編訳】

- ・『アメリカの黒人演説集』東京、岩波書店、2008年11月14日、404頁。

【エッセイ】

- ・「「バラク・オバマ」を翻訳する」、『國文學 特集：翻訳を越えて』所収、學燈社、2008年5月10日、46－53、総頁193。
- ・「荒このみ教授のキャンパスブログ」朝日新聞・朝刊（連載4回）。
 - 「問いたい学生の「勉強力」」2008年6月2日
 - 「再びフェミニズム論争」2008年6月16日
 - 「複眼的思考育む26言語」2008年6月23日
 - 「住民憩い文化の中心に」2008年6月30日
- ・「オバマ氏の躍進と指名確定」2008年6月6日、信濃毎日新聞、京都新聞等、共同通信配信。
- ・「世界の文学・アキ・シマザキ」2008年7月24日、東京新聞。
- ・「マルコム X からオバマへの道」2008年8月19日、公明新聞。
- ・「翻訳ほりだし物・『マルコム X 事典』」2008年9月4日、東京新聞。
- ・「オバマ大統領誕生の文化的背景」2008年11月11日、東京新聞。

【書評】

- ・『アーミッシュの赦し——なぜ彼らはすぐに犯人とその家族を赦したのか』（亜紀書房）ドナルド・B・クレイビル、ステイブン・M・ノルト、デヴィッド・L・ウィーバー - ザーカー著、青木玲訳、図書新聞2008年7月26日。
- ・『鉄の時代』（河出書房新社）J・M・クッツェー著、くぼたのぞみ訳、週刊読書人2008年10月17日。

【講演会・研究会】

- ・東京外国語大学・読売新聞立川支局共催
全体テーマ「世界の《生》きるかたち」、「理想郷“世界の村”の建設——あるアフリカン・アメリカンの夢」2008年2月9日。
- ・日本記者クラブ
「アメリカン・ドリーム（アメリカの夢）」あるいは「アメリカン・ナイトメア（アメリカの悪夢）」2008年3月10日。
- ・科研B イスラーム（代表者青山亨）
東京外国語大学・総合文化研究所
「マルコム X の精神的遺産」2008年6月23日（月）。
- ・福州大学（中華人民共和国福建省福州市）
「アメリカ大統領選挙とアフリカン・アメリカンの歴史的意味」2008年10月8日。

・アモイ大学（中華人民共和国福建省アモイ市）

“Why Is 2008 a Historic Year for the US: An American Dream or an American Nightmare?” 2008年10月10日.

・立命館大学（京都）暴力からの人間性の回復研究会講演会
「トニ・モリスン文学における「暴力」」2008年12月13日.

【受賞】

・トニ・モリスン学会賞受賞、2008年7月。（『トニ・モリスン事典』東京、雄松堂、2006年6月20日、総頁350頁、*The Toni Morrison Encyclopedia*, Elizabeth A. Beaulieu ed. New York: Greenwood Press, 2002の翻訳に対して）

藤井守男

・2008（平成20）年度より、科学研究費補助金を得ての研究「ペルシア語テキストのデータ解析による神秘主義的表現世界に関する基礎研究」（基盤研究(B)：平成20年～23年）を開始し、データ入力作業と平行して、西暦12世紀初頭から13世紀半ばに至る神秘主義テキストの体系的考察を進めている。

【論文】

・「インド亜大陸のペルシア語文学の展開：いわゆる「インド・スタイル Sabk-i Hindi」派の文学の形成をめぐって」、『多言語社会における文学の歴史的展開と現在：インド文学を事例として』科研：基盤研究(A)研究成果報告書（研究代表者・水野善文、平成20年3月発行）所収、15～26頁.

博多かおる

【論文】

・『『オノリーヌ』における謎の読解と共有の幻想』、『テキストの生理学』、柏木隆雄教授退職記念論文集刊行会編、朝日出版社、123-135頁、2008年.
・「バルザック、フローベール作品における街路と「感情教育」」、『東京外国語大学論集』第77号、95-115頁、2008年.

岩崎務

【分担執筆】

- ・『はじめて学ぶラテン文学史』（高橋宏幸編著、ミネルヴァ書房、2008年10月、297頁）、第5章「恋愛詩」（111－130頁）、第6章「抒情詩」（131－150頁）を担当。

【公開講座】

- ・「角の門と象牙の門——ギリシア・ローマ文学に現れる夢——」（ちょうふ市内・近隣大学等公開講座、東京外国語大学第2回、2008年10月）。

加藤雄二

【4月】

- ・ Southeast Missouri State University で開催される学会、“William Faulkner & Kate Chopin” で研究発表をするために概要を提出し、即日受理される。

【6月】

- ・ Nathaniel Hawthorne 学会主催の国際学会 “Starting Over” で、昨年度から予定されていた研究発表を行う。Hawthorne の母校 Bowdoin College の講堂で、“Nathaniel Hawthorne’s Repetitive Double Outset: Twice-told Tales and the Politics of Psychoanalysis” なるタイトルのもと、Franz Kafka の諸作品に影響を与えたとも言われる Nathaniel Hawthorne が、Sacvan Bercovitch などのリベラルな議論とは異なり、精神分析的な自我の枠組みを解体する方向性を提示していることを、Kafka の諸作品や『カフカ——マイナー文学のために』の Deleuze/Guattari と関係づけながら論じた。フランス、カナダからの参加者と同一のセッションだったうえ、フロアにも各国からの参加者がおり、国際色豊かな楽しい議論が展開した。

【7月】

- ・ 東京外語会主催の連携講座の「アメリカ」特集に含まれる一回分の講義として、日本におけるアメリカ文学の文化的論的な位置づけをとりあげた。

【8月】

- ・ 2009年6月に、イスラエル、エルサレム地区のアメリカ文学研究者たちがアメリカの Melville Society と共同主催する第7回国際 Herman Melville 学会に参加するため、Melville

の短編“The Encantadas”と詩集 Clarel の冒頭の詩“Jerusalem”を中心とした研究発表概要を作成、提出する。概要は受理された。

【9月】

- 2009年に開催される Edgar A. Poe 生誕 200 周年学会にそなえるため、フィラデルフィアやニュー・ヨークで資料収集などを行いつつ、Poe と Vladimir Nabokov その他の関係について研究し、研究発表概要を準備する。

【10月】

- Southeast Missouri State University, Center for Faulkner Studies 主催の上記学会で、研究発表“Writing the Heterogeneous South: Incredible Narrations in the Works of Kate Chopin and William Faulkner”を行う。10 数年ぶりにアメリカ南部の先生たちと Faulkner 研究を行えたことは、とても有意義だったと思う。日本からは早稲田大学の和田英子氏も参加され、優れた研究発表をされた。経緯あって長らく中止状態になっている Faulkner 研究を本格的に再開する機会になるかも知れないと思わなくもなかった。学会後、奇しくも同日に、早稲田大学の和田英子教授と東京大学の諏訪部浩一氏からそれぞれのご労作である Faulkner 論を頂戴したことも、印象深い出来事だった。

【12月】

- Maine 州 Bowdoin College での学会の主催者だった Wheaton College, Massachusetts 教授 Sam Coale 氏を東京外国語大学に御招聘し、広島大学、龍谷大学、外語大で、講演会とセミナーを共同で開催した。広島大学、龍谷大学のセミナーでは、広島大学の和田玲子教授をはじめ、本学卒業生で北九州大学准教授の城戸光世氏、本学加藤ゼミ出身の龍谷大学非常勤講師森脇正史氏などの御協力を得て、セミナーは好評のうちに終わった。Sam Coale 教授は、Hawthorne などの南北戦争前のアメリカ作家と現代作家 Don DeLillo など専門にされているかたなので、19 世紀および現代アメリカ文学とゴシックの形式および批評理論との関係について、御講演とセミナー形式での共同研究をお願いした。御講演“American Romance: Hawthorne’s Polarities and DeLillo’s Particles”では、19 世紀作家と 20 世紀作家を比較しつつ、アメリカ文学の基本的な形式である“romance”について、明瞭な理論的枠組みの御説明を頂いた。外語大でのセミナー“Connecting the 19th Century with the Contemporary”では、Coale 教授と同じく Bowdoin College での Hawthorne 学会でお会いした筑波大学の鷺津浩子教授と、筑波大学大学院生のみなさん、東大などの大学院で研究を続けている本学卒業生、本学加藤ゼミの院生、学部生諸君が、それぞれ英語で研究発表をしてくれた。加藤も“Fiction Against the Age of Paranoia: Don DeLillo, William Faulkner, and Contemporary Culture”という研究発表を行った。参加してくれたみなさんが、英語を使って文学・文化研究をすることの意義と楽しさを知ってくれる機会になればとの趣旨でしたが、全員が見事な実力を発揮してくれました。英語を研究のために使用するこ

とや研究活動の将来の可能性に自信を持ってくれたのではないかと感じています。ちなみに、Coale 教授からは後に、“His students are first-rate, excellent in English, well versed in critical theory and on the verge of pursuing Ph.Ds.”との御講評を頂きました(!)。加藤も学生諸君についてはつねづねそう思ってきましたので、みなさん是非自信を持って、今後の勉強と研究活動に励んでもらいたいです。

- ・『総合文化研究』特集のために、Kazuo Ishiguro についてのエッセイ「あらかじめ失われたものの痕跡:Kazuo Ishiguro の「日本」と語りの構造」を書く。この程度の気入れかたでは、Kazuo Ishiguro の全体像をとらえることは決してできないと悟る。残念だとも感じるので、機会があれば Ishiguro に再挑戦したい。多忙のため完成が遅れ、編集に関わられるみなさんに御迷惑をお掛けいたしました。この場をお借りして、御謝罪申し上げます。

【1月】

- ・2009年フィラデルフィアで開催される、Edgar A. Poe 生誕200周年記念学会で研究発表するために、発表概要を作成し提出する。『総合文化研究』のIshiguro論をまがりなりにも書き終える。

川口健一

【報告書】

- ・『1940年代前半ハノイにおけるベトナム文学者・知識人の文化活動の考察と再評価』平成17～18年度科学研究費補助金基盤研究(C)研究成果報告書、2008年3月、60頁。

【事典項目】

- ・「チューノム文学」「バオ・ニン」「文学(ベトナム)」『〈新版〉東南アジアを知る事典』平凡社、2008年6月4日発行。

【書評】

- ・『地獄の一三六六日——ポル・ポト政権下での真実』(オム・ソンバット著、岡田知子訳、大同生命国際文化基金、2007年2月28日発行)『総合文化研究』(第11号)東京外国語大学総合文化研究所、pp.138-142、2008年3月21日発行。

【エッセイ】

- ・「ベトナムの現状」『なぜこの国を伝えたいのか——ビルマ報道とジャーナリストの眼——』日本ペンクラブ第26回WiP(ライターズ・イン・プリズン)の日パンフレット、pp.24-25、2008年3月14日開催。

【市民講座】

- ・国分寺市市民講座「東南アジアの近代文学——ミャンマー・ベトナム編——」
第1回「東南アジアの近代文学」2008年1月22日
第4回「ベトナム文学の展開」同年2月13日
第5回「ベトナム文学を読む」同年2月19日

【その他】

- ・ハノイで開催された第3回国際ベトナム学会議（2008年12月5日～7日）に出席した。1998年の第1回会議以来、ハノイでの開催は10年ぶりのことで、この間の国内外におけるベトナム研究の動向を窺い知ることができた。また旧知の研究者とも語り合うことができ、意義のある刺激的な経験となった。

菊池陽子

【事典項目の執筆】

- ・「カイソン・ポムウィハーン」(p.87)「スパーヌウオン」(p.223)「パテト・ラオ」(p.338)「プーマ」(p.386)「カムタイ・シーパンドーン」(p.501)「チュームマリー・サイニャソー」(p.507) 桃木至朗他編『新版 東南アジアを知る事典』平凡社 2008年6月

【その他】

- ・本学図書館所蔵革命期ラオス語新聞のデジタル化作業（学部・大学院競争的経費による）

李孝徳

- ・文部省の「海外先進研究プログラム」および東京外国大学の海外研修で米国に滞在。

松浦寿夫

【文章】

- ・「二つの鏡」(4～8)、『水声通信』4(1)・4(3～6) (通号22、24～27)。

【シンポジウム】

- ・「ピカソ——今日の展望——」11月15日(土)、国立新美術館（河本真理氏（京都造形芸

術大学准教授)、田中正之氏(武蔵野美術大学准教授)、林道郎氏(上智大学教授)、「巨匠ピカソ」展(国立新美術館・サントリー美術館、10月4日～12月14日)シンポジウム)

水野善文

【論文】

- ・2008年3月16日 “The Atmosphere of Bhakti in Indian Literary works: Especially in a Buddhist stotra, one of Katha literature and a Folktale.” 科学研究費補助金基盤研究(B)『中世ヒンドゥイズムにおけるバクティ運動の歴史的展開』(研究代表者:山下博司)成果報告書、pp.137-155.
- ・2008年3月31日 「ジャンルを異にする諸テキスト間の時空——インド文学史の記述法を模索しつつ——」科学研究費補助金基盤研究(A)『多言語社会における文学の歴史的展開と現在』研究成果報告書(研究代表者:水野善文)、pp.171-195.

【口頭発表】

- ・2008年6月18日 南アジア学会設立20周年記念連続シンポジウム第6回(東京大学)「インド的文明とは何か? II」の総括
- ・2008年11月15日 科学研究費補助金基盤研究(B)『ヒンディー・ウルドゥー韻律のリズム構造の解明——ペルシア起源説の検証をとおして——』(研究代表者:長崎広子)第2回研究会における発表「ケーシャヴダースが紹介するブラジ・バーシャー詩の韻律」

【シンポジウム、研究会のコーディネート等】

- ・2008年1月12日 南アジア学会設立20周年記念連続シンポジウム第三回「インド的文明とは何か? II」(京都大学)コーディネートならびに司会

【講演等】

- ・2008年10月16日 ちょうふ市内・近隣大学等公開講座『世界の‘夢’模様——文学を浮遊して——』「驚きの一致!インドの夢占い——古代からの吉凶判断——」

【エッセイ】

- ・2008年2月18日 「インドのことばをめぐるあれこれ [1] サンスクリット語の今」 Teaching English Now, Vol.11(三省堂)、p.1.
- ・2008年3月31日 「本という運命(さだめ)に身をまかせて」 Castalia(知の泉:東京外国語大学図書館報)第15号、pp.3-4.
- ・2008年月日 「インドのことばをめぐるあれこれ [2] ベナレスって、どこ?」 Teaching English Now, Vol.12(三省堂)、p.1.

村尾誠一

2008年中に活字になった論文は以下のものです。

- ・「後鳥羽院正治初度百首と勅撰和歌集への意志——『正治和字奏状』の再検討を発端に——」
(『国語と国文学』85巻4号・2008年4月)

執筆は去年です。今年書いた研究論文は来年刊行予定の単行書に収録するつもりです。
その他次のような報告も行いました。

- ・「古典の精読とは何かを考えるために——和歌注釈は何を明らかにしようとしてきたか——」(科研費日仏合同シンポジウム 2008年11月8日 於東京外国語大学)
- ・「*Waka in the Middle Age of Japan — KENKŌ and SHŌTETSU, in the Twilight of the Court Ages World —*」(大学院G Pイタリア合同シンポジウム・セミナー、2008年11月18日ボローニャ大学・2008年11月21日ローマ大学)

前者は科研費報告書に、後者はボローニャで出版される『Giappone e Italia : le arti del dialogo』に収録予定です。

また、監修者の一人として関わっていた高等学校国語教科書『国語 古典』(数研出版・2008年4月)がいよいよ使用年度を迎えました。同時に指導書『国語古典教授資料』(数研出版・2008年4月)も刊行されました。

中山和芳

【論文】

- ・「オペラ『黒船』と映画『黒船』——アメリカ人による「唐人お吉」の表象」『総合文化研究』第12号、2009年3月刊行予定。

【その他】

- ・「ドイツによるカロリン諸島支配(20世紀初頭)——ポナペ島の反乱についてのギルシュナー博士の報告」の解説。歴史学研究会編、『世界史史料 9』(岩波書店、2008年6月)399-400頁。

沼野恭子

- ・1月22日(土) オープンキャンパスでロシア語体験授業
- ・11月23日(日) 東京外国語大学ロシア会で講演「日本ブームの再来と現代ロシア文化」
- ・11月29日(土) 朝日カルチャーセンター横浜で講演「ドストエフスキーの末裔たち」
- ・『新潮』2008年12月号 ロシアの作家マリーナ・ヴィシネヴェツカヤの短編「庭の経験」の翻訳・解説を掲載
- ・12月16日(火) 東京外国語大学ロシア東欧課程主催・中野健三基金シンポジウム「チャストゥシカとロシア・ポップスの出会い」の企画・司会

岡田和行

【論説】

- ・「文学研究(モンゴル語)」(吉田順一編・包国慶訳『日本蒙古学研究史』所収)、内蒙古人民出版社、呼和浩特市、2008年1月、372-395頁。

【発表論文要旨】

- ・“My Homeland” and “Historical Poem” by D. Natsagdorj, Summaries of Congress Papers, “Global Order from the Perspective of Archives, History, Literature and Media — Focus on North East Asian Society —”, International Symposium in Ulaanbaatar, Mongolia, From Monday, 23rd June to Wednesday, 25th June 2008, pp.22-23.

【研究発表】

- ・「D. ナツァグドルジの詩『わが故郷』と『史詩』について」、日本モンゴル文学会春季研究発表会、於東京外国語大学本郷サテライト7階会議室、2008年6月7日。
- ・「D. ナツァグドルジの詩『わが故郷』と『史詩』について(モンゴル語)」、国際シンポジウム「文学・メディア・アーカイブズからみたグローバル秩序——北東アジア社会を中心に——」、第2部会「北東アジア文学の中の社会像と世界像」、於モンゴル日本センター1階多目的室(ウランバートル)、2008年6月24日。
- ・「モンゴルの民主化とポスト社会主義時代の文学について」、第16回モンゴル学術交流会、於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所大会議室、2008年7月13日。
- ・「『遅れたばあさん訪ねある記』再読——ダムディンスレン生誕百周年に寄せて——」、日本モンゴル文学会秋季研究発表会、於大阪大学箕面キャンパスB棟2階学術交流室、2008年11

月 29 日。

岡田知子

【論文】

- ・「現代の婦女庭訓としてのカンボジア大衆小説——女性のアイデンティティと新しい価値体系の形成——」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 39 号、2008 年、pp.1-17.

【その他】

- ・「カンボジア文学」の項『ブリタニカ国際大百科事典』2008 年 11 月
- ・「世界の文学 カンボジア 『女性作家による恋愛小説』」東京新聞（夕刊）、2008 年 5 月 15 日掲載
- ・「カンボジアの文学」の項『東南アジアを知る事典』平凡社、2008 年、pp.566-567.

【口頭発表】

- ・東南アジア学会第 80 回研究大会、シンポジウム 1 「東南アジア現代文学の眺望——作家、歴史、社会」において発表「カンボジア——内戦終結後からの再出発」2008 年 11 月 30 日、東京大学（駒場キャンパス）にて

【研究】

- ・科学研究費補助金基盤研究（C）「現代カンボジア文学の翻訳と研究」、研究代表者、2007 年－2009 年。
- ・東南アジア諸言語研究会（慶應義塾大学言語文化研究所）クメール語担当

佐々木あや乃

【論文】

- ・「ハーフェズ詩注解 (5)」『東京外国語大学論集』第 77 号 pp.135-152. 2008 年 12 月 31 日
- ・“Tahavvol-e estelahat-e 'erfani — moqayese-ye *Sharh-i ta'arruf limazhab al-Tassawwuf ba Kashf al-Asrar wa 'Uddat al-Abrar* (va estefade az dade-ye kamyuteri-ye *Kashf al-Asrar wa 'Uddat al-Abrar* (al-Nawbat al-Thalitha)) —” (in Persian) *Ayene-ye miras* (Mirror of Heritage), pp.392-403, New Series, Vol.6, Issue No.2 (41), Summer 2008.

【研究発表等】

- ・「ハーフェズの詩における「集い」の描写」（ペルシア語）2008 年 12 月 7 日 International Conference of “Shiraz School” (Shiraz)

- ・「ペルシア詩の韻律の概要」 2008年11月15日 拓殖大学 科研「ヒンディー・ウルドゥー 韻律のリズム構造の解明——ペルシア起源説の解明をとおして——」研究会
- ・「神秘主義用語の変遷——『神秘主義入門解説』と『神秘の開示』との比較（『神秘の開示』第三階梯のデータベースを用いて）—— (3)」(ペルシア語) 2008年8月28日 The 3rd National Congress of Iranian Society for the Promotion of Persian Language and Literature, Iranology Foundation(Tehran)
- ・「神秘主義用語の変遷——『神秘主義入門解説』と『神秘の開示』との比較（『神秘の開示』第三階梯のデータベースを用いて）—— (2)」(ペルシア語) 2008年1月12日 日本学術振興会アジア・アフリカ学術基盤形成事業国際セミナー「イランとイスラーム——文化と伝統——」 千里ライフサイエンスセンター

【教材（専攻語内資料）】

- ・『はじめて読むペルシアの物語』（改訂版）ii, 117 p. 付属 CD7 枚組 2008年4月18日（学部競争的経費）

【市民講座】

- ・ちょうふ市内・近隣大学等公開講座「イスラーム世界の文学にみる「夢」——ペルシア文学を中心に——」 2008年10月9日 文化会館たづくり

【研究調査】

- ・文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B））「ヒンディー・ウルドゥー韻律のリズム構造の解明——ペルシア起源説の解明をとおして——」（研究代表者：長崎広子）、同じく「ペルシア語説教テキストのデータ解析による神秘主義的表現世界に関する基礎研究」（研究代表者：藤井守男）により、8月11日から9月1日まで、資料収集及び調査のため、イラン（テヘラン）へ出張。

柴田勝二

2008年は11月にフランスの国立東洋言語文化大学との共同シンポジウムを本学で「内と外から見る日本文学」と題して開催し、無事終えることができました。古典・現代の詩と近代の小説を主な素材として、それらをどのように研究し、また教室で教えるかという問題に対する提議と討論がおこなわれましたが、作品に対する距離は日本人とフランス人との間で、あるいは中世人と現代人の間で本質的な距離はなく、結局作家の表現に対して読み手は等しく他者であるという感慨を抱かされました。その他者性をいかに乗り越えるかということが、つねに文学作品を読み解く際の難関であり、また魅力でもあるようです。

なお下には記していませんが、ブラジルで出版されたポルトガル語訳『こころ』に解説を書きました。これを機に漱石の文学が海外でさらに認知されることを期待します。また08年は日本課程の語劇「竹取物語」に脚本を提供しましたが、もともと演劇専攻であった私には、昔に帰るようななつかしさも感じられ、演劇に対する熱情が蘇るような気がしました。戯曲を書くのは楽しいので、これからも機会があれば書いてみたいです。08年の論文、講演などは次のとおりです。

【論文】

- ・「〈動物〉を殺す話——『風の歌を聴け』『1973年のピンボール』と六〇年代」（『敍説』III—02（2008・2））
- ・「〈天皇〉のいない世界——『地の果て 至上の時』の象徴界」（東京外国語大学『総合文化研究』11号（2008・3））
- ・「殺し、交わる相手——『海辺のカフカ』における過去」（『東京外国語大学論集』76号（2008・7））
- ・「〈終わりの後〉の物語——『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』とポストモダン批判」（『東京外国語大学論集』77号（2008・12））
- ・「遍在する「底」——『ねじまき鳥クロニクル』『アフターダーク』における暴力」（『敍説』III—03（2008・12））

【書評】

- ・「大澤真幸『ナショナリズムの由来』」（『日本文学』2008・4）

【発表】

- ・「中上健次の時空」（シンポジウム「内と外から見る日本文学」（於・東京外国語大学、2008・11・8））

【講演】

- ・「『三四郎』と近代日本」（於・熊本大学「『三四郎』百年祭」、2008・6・8）
- ・「安部公房の世界」（於・フェリス女学院大学、2008・6・27）

鈴木聡

【論文】

- ・「反覆と音楽——ヴラジーミル・ナボコフの『ルージンの防禦』」（『東京外国語大学論集』第76号、pp. 63-83）。
- ・「亡命と帰還——ヴラジーミル・ナボコフの『偉業』」（『東京外国語大学論集』第77号、

pp. 71-93)。

【書評】

- ・ 亀山郁夫著『ドストエフスキー——謎とちから』（『総合文化研究』第11号、pp. 151-159）

谷川道子

2008年度も慌しい1年でしたが、何はともあれ、紆余曲折を経ながらもおかげ様で東京外国語大学出版会が10月1日にたちあがり、編集者竹中龍太氏と岩崎稔編集長のもと、2009年3月には数冊の刊行で船出する運びとなりました。「我らが出版会」として、今後ともに大切に末永く育て支えていただければ嬉しく思います。個人的な研究活動としては、流れの中で副産物としてついでに生まれてきたようなものばかりですが、今回も備忘録的に——

【演劇（実践）と関わっての翻訳や論考について】

- ・ 『劇場を世界に——外国語劇の歴史と挑戦』（新宿書房、2008年10月）。柳原さんと私の共編となっていますが、何より4年間の「語劇GP」委員全員の活動の総括本です。私の直接の関与は序章「語劇／教育劇の位相と可能性について考える」（7－24頁）と第1章の対談：栗山民也 x 谷川道子 x 柳原孝敦 x 佐野勝也「演劇と言葉をめぐって」（26－60頁）、および谷川道子+柳原孝敦連名の「あとがき」（430－436頁）。この『総合文化研究』12号でも柴田先生に書評に取り上げて頂いていますので、紹介はそちらに譲りますが、1900年に始まった「語劇」が世間的・社会的にも認知されて、今後のさらなる発展の百年につながる礎になるよう、この本を多様に役立ててもらえればと念じています。
- ・ SPAC（静岡舞台芸術センター）の秋の演劇祭の特集は「ハムレットとドンキホーテ」でした。宮城聡演出の『ハムレット』と太宰治作・外輪能隆演出の『新ハムレット』の競演するなか、やはりミュラー作の『ハムレットマシーン』も無視できない、ということで、今回は1992年に自分の劇団でこの作品に挑んだ大岡淳氏が再び挑戦したのが、2008年12月中旬公演の『大人と子供によるハムレットマシーン』。「翻訳：谷川道子」となっていますが、かつて黒テントのアヴィニオン公演用に訳した原作を、静岡のプロ・アマの大人と中学生・高校生の子どもたちが稽古の中で自分の身の丈で読み解き、演じながら自分たちの台本に作り変えていったもの。なるほど今の子どもたちはこう読み演じるのかと、これはこれで中々の企てだった。その機関誌「劇場文化」（166－181頁）に寄稿したのが、「『ハムレット』の読み変換の起動装置＝『ハムレットマシーン』」です。
- ・ 東京演劇アンサンブル（TEE）の2009年2月の公演『ブレヒトのアンテイゴネ』。これもかつて1977年の福岡現代劇場の公演用に訳したものに新しく手入れして上演台本を作成。

その稽古開始時に劇団稽古場で講演したものをもとに、上演パンフに「『ブレヒトのアン
テイゴネ TEE 2009』の位相——？」(8 - 13 頁) を寄稿。ブレヒトが唯一ギリシア悲
劇を題材に改作したもので、TEE も初めてのギリシア悲劇への初挑戦だった。

- ・ ついでに、昨年度の『総合文化研究』第 11 号に掲載していただいた「異文化受容のポリ
テイクス——日本近代化のプリズムから見たドイツ演劇受容」(76 - 91 頁) のドイツ語
版が収録された Theater der Zeit 社刊行の「Theater in Japan」が、2009 年 2 月にやっと上梓。
私の分担分は、“Politik der Kulture. Rezeption des deutschen Theaters.” p.186-197.

【次にレクチャーや書評など】

- ・ 2008 年 12 月 23 - 27 日の 5 日間にわたって開催された演劇学会西洋演劇史学会主催の
毛利三彌氏を中心とする「演劇討論セミナー」に部分参加。初日の「ドラマと非ドラマ
——ギリシア以来の西欧ドラマと日本古来のパフォーマンス」には鈴木忠志氏や山下純
照氏とともにパネリストとして参加。
- ・ 世田谷パブリックシアターの連続公開講座「公共圏としての劇場——劇場空間の可能性」
の第 2 回として、2009 年 1 月に「演劇王国ドイツの公立劇場制度について」講演。
- ・ 日本独文学会の学会賞選考委員を仰せつかって、和書部門で受賞となった山口庸子著『踊
る身体の詩学——モデルネの舞踊表象』の書評を学会誌別冊「ドイツ文学」2008 年秋号
32 - 33 頁に掲載。
- ・ こちらもついでに、図書館長として図書館報「カスターリア」14 - 16 号に巻頭言を 3 回書
かせていただいたので、備忘録として：「〈図書館〉は異世界への「魔法の絨毯」——附
属図書館長の就任にあたって——」「〈バベルの図書館〉に思うこと——新入生の皆さんへ」
「〈マイ図書館〉のすすめ——新入生、あるいはこれから留学する皆さんへ」

そしてあらためて気づいたのは、大学キャンパスも図書館も劇場も、ともにそれぞれ
人が集い、出会い、思い、学び、遊ぶための広場＝フォーラムなのだ、ということでした。

土佐桂子

【論文】

- ・ 「宗教用地における住民の世帯戦略——カリスマ僧没後の変化を中心に」『東南アジア研
究』45-3: 428-449。(2007 年、ただし実際の発行 2008 年 3 月)

【報告書、その他】

- ・ 「軍政下の宗教政策と宗教をめぐる状況」『アジア研ワールド・トレンド』155: 14-17。
- ・ 「ミャンマー社会の中の仏教と僧侶」渡邊直樹編『宗教と現代が分かる本・2008』、平

凡社、pp.82-84.

- ・「ミャンマーの暦・カレンダー」『アジア遊学 106号：カレンダー文化』勉誠出版、pp.84-92.
- ・「ミャンマー社会における仏教と僧侶」『いまミャンマーで何が起きているか』日本財団セミナー報告書

宇戸清治

【論文】

- ・「タイの映画 (1) 黎明期」(『タイ国情報』第42巻第5号、財団法人日本タイ協会、単著、pp.32～41、2008年9月)。
- ・「タイの映画 (2) 第二次世界大戦前の黄金期」(『タイ国情報』第42巻第6号、財団法人日本タイ協会、単著、pp.27～37、2008年11月)。

【著書・翻訳】

- ・『タイ語：ACTION 活動&言葉のガイドブック』(社団法人青年海外協力協会、監修、155頁、2008年3月)
- ・『タイ語』(大東文化大学「アジア理解教育の総合的取組刊行物シリーズ No.4」、単著、111頁、2008年3月)
- ・『たのしいタイ語：一冊で学ぶ会話、文法、文字』(大学書林、単著、164頁、2008年10月)
- ・『罪との闘い』(シーブーラパー著、翻訳、財団法人大同生命国際文化基金「アジアの現代文学：タイ：14、287頁、2008年11月)。

【研究調査】

- ・科学研究費補助金基礎研究 (C) 「タイの国民作家シーブーラパーの総合的研究」(研究代表者) 平成20～22年度。本年度は8月にシーブーラパーの遺族をバンコクに訪ね、資料閲覧や中国亡命時代の活動についてインタビューを実施し、貴重な証言を得ることが出来た。

【その他】

- ・「世界の文学タイ：「やおい小説、雨後の竹の子の勢い」」(東京新聞、2008年6月26日夕刊)。
- ・発表「タイ映画『蝶と花』に見るイスラームの表象」(第2回「イスラーム表象」科学研究会)、2008年7月17日。
- ・独立行政法人 JICA 青年海外協力隊語学諮問委員としてタイ語教材・試験問題作成、プログラム評価に協力 (2008年4～12月)。
- ・『東南アジアを知るシリーズ：タイの事典 (改訂版)』(めこん、2009刊行予定) の約50

項目を執筆。

上原泉

【著書】

- ・上原泉 2008 第1部 乳・幼児の記憶 2章 短期記憶・ワーキングメモリ (pp.21-30), 3章 エピソード記憶・意味記憶 (pp.31-37). 太田信夫・多鹿秀継 (編著) 記憶の生涯発達心理学 北大路書房 pp. 21-37.
- ・上原泉 2008 第I部 私が生まれるところ 2章 思い出の始まり—初期のエピソード. 仲真紀子 (編著) シリーズ：自己心理学 第4巻 認知心理学へのアプローチ 金子書房 pp. 30-46.
- ・上原泉 2008 第I部 自伝的記憶研究の方法 4章 自伝的記憶の発達と縦断的研究 佐藤浩一・越智啓太・下島裕美 (編著) 自伝的記憶の心理学 北大路書房 pp. 47-58.

【学術論文】

- ・上原泉 2008 幼少期の自伝的記憶研究の課題——岩田論文へのコメント——. 心理学評論, 51 (1), pp. 37-42.

【学会発表】

- ・上原泉 2008 自伝的記憶が形成される時期の検討：幼少期の過去の語りとその変遷過程. リレー講演「自伝的記憶の発達」(大会主催：石王敦子・落合 正行 企画) 内での発表. 日本発達心理学会第19回大会, 大阪国際会議場.

八木久美子

【論文等】

- ・2009年1月 「イスラムの『俗人』スター説教師」『東京外国語大学論集』77
- ・2008年7月 「教養科目としてイスラムをいかに教えるか」『東京外国語大学論集』76
- ・2008年6月 「二十世紀後半のアラブ世界におけるイスラム教徒の「他者／自己」像の形成とその受容」(平成16～19年度科学研究費補助金基盤研究 (C) 研究成果報告書)

【市民講座等】

- ・2008年10月16日、12月18日、目黒区社会教育登録団体「やさしく知ろうイスラーム」シリーズにて「キリスト教徒イスラーム」 於：目黒本町社会教育館

【高校生向け模擬授業】

- ・7月18日厚木高校、11月14日町田高校にて、「アラビア語を通して理解するイスラム」というタイトルで、模擬授業を行いました。

山口裕之

【論文】

- ・「〈視覚—触覚〉の言説とメディア理論（上）——ベンヤミンとマクルーハンの邂逅——」『思想』（岩波書店）No. 1017、2009年第1号、pp. 6-23.
- ・「〈視覚—触覚〉の言説とメディア理論（下）——ベンヤミンとマクルーハンの邂逅——」『思想』（岩波書店）No. 1018、2009年第2号、pp. 76-98.

【翻訳】

- ・カール・クラウス『黒魔術による世界の没落』（山口裕之・河野英二訳）現代思潮新社（2008年4月）

【書評】

- ・田中純『政治の美学』（東大出版会、2008年）『週刊 読書人』2009年2月20日号3面

【新刊紹介】

- ・山口裕之ほか（訳）カール・クラウス『黒魔術による世界の没落』（表象文化論学会 News Letter: REPRE 01 (2008年7月)
<http://repre.org/repre/vol6/books/yamaguchi.html>

柳原孝敦

1. 監訳書 フィデル・カストロ『チェ・ゲバラの記憶』（トランスワールドジャパン）
昨年、同様の形で刊行した『少年フィデル』と対をなす作品。
2. 翻訳 アルフォンソ・レイェス／Alfonso Reyes『アナワクの眺め（1519）』／Visión de Anáhuac (1519) (México, Universidad Autónoma de Nuevo León)
メキシコの批評家アルフォンソ・レイェスのもっとも知られた散文作品の二言語版。日本語部分の翻訳を担当。レイェスの出生地モンテレイのヌエボ・レオン州立大学から出版。
3. 共編著書『劇場を世界に——外国語劇の歴史と挑戦』（エディマン／新宿書房）
共編著者は同じく所員の谷川道子さん。特色G P「生きた言語修得のための26言語〈語劇〉支援」の活動を総括する書籍。

4. 『ビクトル・エリセ DVD-BOX』(紀伊國屋書店) 所収の3枚のDVD (『ミツバチのささやき』、『エル・スール』、『挑戦』) の紹介、解説のリーフレット。
5. 論文「丘に挟まれた溪谷での、さして緊迫してもいない一日——盟友の死を描写するフィデル・カストロ」、『現代思想』第36巻第6号、pp.162-171。臨時増刊号「フィデル・カストロ」特集に所収。

吉本秀之

【共著論文】

- ・ Hiro HIRAI and Hideyuki YOSHIMOTO, “Anatomie du Chymiste Sceptique: Robert Boyle et le Secret de ses premières Sources sur la Croissance des Métaux”, in Charles Ramond et Myriam Dennehy (eds.), *La philosophie naturelle de Robert Boyle* (Paris: Vrin, 2009), pp.91-116.

【エッセイ】

- ・ 吉本秀之「時代を切り開いた科学者第21回 医化学の改革者ファン・ヘルモント」『理科教室』2008年12月号、pp.98-101.

【シンポジウム】

- ・ 吉本秀之「18世紀ドイツの化学：歴史記述の問題」『化学史研究』第35巻(2008): pp.102-103.